

福祉NPOの社会学

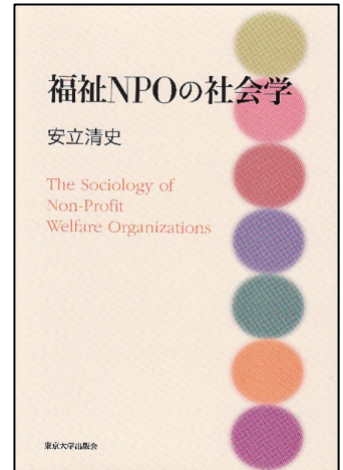
安立清史 (九州大学大学院人間環境学研究院准教授)

The Sociology of
Non-Profit
Welfare Organizations

2008年新刊

A5判 280頁 / 税込 5985円 (本体 5700円) ISBN978-4-13-056065-8

高齢化で福祉や介護の必要が拡大する進む現代日本社会、福祉NPOが果たす役割は大きい。福祉NPOはどのような機能や役割をもっているのか。市民たちの自発的な福祉事業が社会をどう変えていくのか。アメリカの事例と比較しながら、これからの福祉社会を考察する。



主要目次

- 序章 福祉NPOの社会学をめざして
- 1章 NPOの理論・NPOの社会学
- 2章 福祉NPOの理論・福祉NPOの社会学
- 3章 日本における福祉NPOの生成と展開 地域福祉・介護保険とNPO
- 4章 福祉NPOの可能性と課題 米国のAARPを事例として

推薦の言葉

NPOリーダー必読書 : NPO存在の意味を根本から問う!

NPO法人 市民福祉団体全国協議会 専務理事・田中尚輝

本書は、介護系NPOにとどまらず、すべてのNPOのリーダーに必ず読んでほしい好著である。

著者は長年の間、社会学の観点からボランティア活動、NPOを介護や地域福祉の観点から調査・分析し、研究を進めてきた。ことに、アメリカのNPOとの対比で分析されており、新鮮な刺激を受ける。まず、日本社会にとっては異質であるはずのNPOが、日本的な組織へと変質・変容・転換しているのではないかと、問題意識が根底に流れている。これはアメリカ型NPOが日本において定着するためには、旧来の常識や仕組みとの間において、摩擦や衝突をさけて通れないはずである。ところが、音なしの状況でNPOが日本社会に定着しつつあるのは、本来のNPOが「日本化」し、日本社会を変える武器になっていないからではないか、という指摘である。このことが、具体論としては、介護保険制度の導入前夜の社会福祉制度を変えることができるという興奮が、いつのまにかしほみ、NPOを含む介護事業者が古い福祉システムの中に包含されつつあるのではないかと、指摘につながる。著者は多方面の調査・研究をふまえて、社会学の観点からNPOがエネルギーを持つために、NPO関係者の挑戦(たとえば、「有償ボランティア」)が、日本的風土に巻き込まれ、「有償無償」についての形而上学的な論議に巻き込まれすぎているのではないかと、そうではなくNPO本来の「社会を変える」観点のもう一度見直しを迫っている。

NPO法人の数が増えるものの全体としては「踊り場」にあり、ここからNPOの本来の意味を踏まえて脱出するためには、NPOリーダーにとっての必読の書である。